

全日本仏教会とインドネシア

——一九五九年のウエサカ祭出席と戦犯遺骨送還運動——

木村文輝

一 インドネシアへの代表派遣をめぐって

一九五九年五月一八日午後一時五九分、墨染めの僧衣をまとった一人の日本人僧侶を乗せて、日本航空七〇三便は夜の東京国際空港を飛び立った。この僧侶は、静岡市にある曹洞宗顕光院住職、木村義祐（当時五六歳^①）。全日本仏教会（以下、全日仏と略）を代表して、単身インドネシアの首都ジャカルタへ向かう彼には、主に二つの使命が委ねられていた。^②第一は、インドネシア仏教界の主催によってポロブドゥール遺跡で開催されるウエサカ祭^③に、日本仏教徒を代表して参加すること。第二は、第二次世界大戦終結後、戦争犯罪人としてジャカルタのグロドック刑務所にて

処刑された人々の遺骨の送還を、同国の政府関係者に要請することであった。

ただし、今回の代表派遣は、全日仏が十分な調査と周到な準備にもとづいて行ったものとは必ずしも言い難かった。それどころか、代表に課せられた二つの使命は、いずれも外部から持ち込まれた案件であり、詳しい事情は全日仏でもほとんど把握できていない状態であった。

まず始めに持ち込まれたのは、戦犯の遺骨問題である。この問題は、当初、インドネシアに帰化した残留元日本兵達が現地の民間団体として着手したものであり、元日本兵の西村正道氏（インドネシア名、モーハ・トーハ・ニシムラ）が、日本での遺骨の受け入れ機関を求めて東京在住の

全日本仏教会とインドネシア（木村）

実兄に連絡をとったのが発端である。連絡を受けたこの実兄は、一九五八年のある時期に全日仏に連絡して協力を依頼した⁽⁴⁾。全日仏では直ちに受け入れ機関の設置を計画し、政府に協力要請の陳情を行った。だが、現地の情報は極めて限られており、その上、海外渡航が厳しく制限されている当時の状況において、全日仏としても具体的には何ら有効な手立てを講じることができないのが実情であった。

そうした矢先、インドネシア仏教界からのウエサカ祭への招待通知が、三月一〇日付けで外務省から全日仏に手交された⁽⁵⁾。しかも、その招待には、ウエサカ祭出席に要する同国内での経費を、インドネシア仏教界が負担するという条件が付せられていた。この条件のおかげで、全日仏は代表派遣を日本政府に申請し、その許可を得ることが可能になったのである⁽⁶⁾。全日仏ではこの機会を利用して、併せて遺骨問題の調査を行い、可能であれば現地の政府関係者などに遺骨送還の許可を求めることを決定した。

とは言え、全日仏ではこの代表派遣の意義を、それほど大きくとらえていなかった可能性がある。とりわけウエサカ祭への出席は、仏教界による単なる国際親善の一環とみ

なされていたにすぎず、むしろ代表派遣の付随的な目的としてしか位置づけられていなかった感がある。このことは、代表の人選から見てもあながち的外れな推測ではない。と言うのも、ウエサカ祭に列席した各国の僧侶達が、いずれもそれぞれの国の仏教界を代表する高僧達であったのに対して、全日仏が派遣した代表は、一地方寺院の住職に過ぎなかったからである。

代表として派遣された木村は、永平寺地方副監院、曹洞宗静岡教区連合会初代会長などの役職にあったとは言え、それまで全日仏の活動には関与しておらず、曹洞宗の中でも特に重要な地位に就いていたわけではない。そのような彼が、如何なる理由で今回の代表に選ばれたのかについて、詳細は不明である。当時、高階瓏仙曹洞宗管長が全日仏の会長であったため、代表の人選は曹洞宗内部で進められたようであるが、木村が代表に選任された理由は、高階師との個人的な関係によるとみるのが妥当であろう。いずれにせよ、木村の派遣は、おそらく四月二〇日に開かれた全日仏の常務理事会で正式に決定され⁽⁷⁾、五月一日には各地の新聞を通じて全国に報道された。後日ある新聞は、『対日

感情はまだ悪い。それに遺骨が沢山あつてだれもまだ手をつけていない』との外務省の話を聞いた木村師ははじめ二の足を踏んだが『人のいやがる所へ行き英霊たちの魂を慰めるのが仏に仕える者の本来のつとめではないだろうか』⁽⁸⁾と思ひ直し「たという木村の回想を伝えている。

ところで、今回の代表派遣に関わる二つの主要な目的は、海外における戦没者の慰霊と仏教による国際親善という、全日仏が発足以来推進してきた事業に関わるものであつた。だが、この前者の事業も、実は仏教による国際親善によつて支えられたものであつた。のみならず、全日仏の発足そのものが、第二次世界大戦後にアジア各地で沸き上がった仏教復興運動や、その中で生まれてきた国際的な仏教交流の機運と無関係ではなかつたのである。

本稿では、復興を遂げつつあつたアジア各国の仏教事情と、戦後の社会において新たな役割を模索する当時の日本仏教界の動きに目を配りながら、一九五九年に全日仏がインドネシアへ派遣した木村代表の足跡を追いかけてみることにしたい。

全日本仏教会とインドネシア（木村）

二 アジアにおける仏教復興と全日本仏教会の発足

(一) アジアの仏教復興運動

まず始めに、全日仏が仏教による国際親善活動に関わることになつた背景を明らかにするべく、今世紀初頭以来の、アジアの幾つかの地域における仏教界の動きを簡単に眺めてみよう。

改めて述べるまでもなく、約二五〇〇年前に釈尊によつてインドで開かれた仏教は、その後の長い歴史の中でアジア各地に伝えられ、それぞれの地域の伝統的な信仰と融合しながら、多彩な仏教文化を開花させた。しかし、インドではヒンドゥー教の胎頭やイスラム教の侵攻などによつて、一三世紀には仏教の伝統が途絶した。インドネシアにおいても、イスラム教の伸長によつて仏教は一五世紀頃から衰退の一途をたどり、一七世紀にはバリ島以外の地域から表面上姿を消したのである。

一方、セイロンでは一六世紀以降、相次いでポルトガル、オランダ、イギリスの植民地とされたために、仏教は度重なる迫害を受けて衰退した。ビルマでも、一九世紀末にイ

ギリスの支配下に入ると仏教受難の時代を迎えることになった。

そのような状況下にあつて、セイロンの仏教は、一九世紀後半に行われたキリスト教との教義論争での勝利を契機に復興の糸口をつかんだ。当時、アメリカで神智学協会を設立していたオルコット大佐とブラヴァツキー夫人がこの論争の報告を聞いて仏教に関心を抱き、セイロンを訪れた。以後、彼らの活躍に刺激を受けて、様々な仏教復興運動が同地で繰り広げられることになる。更に、そうした運動が、仏教を精神的な支柱とするセイロンの民族主義を开花させ、一九四八年のセイロン独立へと導くことになった。

これに対して、ビルマでは青年僧の中から反英闘争に積極的に参加する者達が現れた。その結果、仏教は独立運動と表裏一体の民族主義を高揚させ、それを組織化するのに大きな役割を果たした。このことが、一九四八年の独立達成をもたらすとともに、それ以後のビルマ政府による仏教優遇政策を生み出すことになったのである。

このように、セイロンとビルマにおける仏教復興運動は、いずれも民族主義と結び付いた点に共通の特徴を見出すこ

とができる。同時に、この二カ国の仏教は、確かに衰退の途上にあつたとは言え、未だ完全に途絶えていたわけではない。それ故、復興運動は、人々の中に生き続けている仏教精神を再び活性化させることによつて進められた。

しかしながら、はるか数世紀前に仏教の伝統そのものが消滅していたインドやインドネシアでは、仏教の復興運動はまったく新しい宗教を導入する形を取ることになった。

まず、インドにおける仏教の復興は、一九五〇年代にアンベードカル博士の指導の下で行われた集団改宗によつて実現した。ただし、これは不可触民階層の者達をカースト差別から解放するという目的にもとづく社会変革運動に他ならなかつた。そのため、アンベードカル博士はこの目的に合致させるべく、仏教の教えを独自に改変し、従来の仏教とは異なる「新仏教」を生み出すことになった。⁹⁾

インドネシアでも、仏教復興が本格化したのは一九五〇年代であつた。その中で、指導的な役割を果たしたのがアシン・ジナラツキタ師である。彼の立場は、純粹に宗教としての仏教の復興を願うものであつた。しかし、彼はビルマから上座仏教の教えを導入しつつ、同時に、中国系住民

の間で伝統的に信仰されてきた大乘仏教の立場をも取り入れて、「ブツダヤーナ」(仏乗)と呼ばれる独自の仏教思想を展開したのである。⁽¹⁰⁾

「インドネシアにはインドネシア独自の仏教があつてもよい⁽¹¹⁾」というアシン・ジナラツキタ師の立場は、「インド教的地盤の上に、大乘やテーラヴァアードにかかわりなく、一つの新しいインド仏教⁽¹²⁾」を生み出そうとしたアンベードカル博士のそれと共通すると言えるだろう。同じように「仏教復興」を目指しながら、これら両国の事例は、明らかにセイロンやビルマの場合とは異なる色彩を帯びていたのである。

だがいずれにせよ、一九五〇年前後に東南アジアを中心として仏教復興の機運が盛り上がっていたことは確かである。そして、このような熱気の中から、新たに世界的な規模で仏教界の連帯を模索しようとする動きが生まれてきた。

一九五〇年五月二五日、マララセーケラ・セイロン仏教会会長の呼びかけに応じて、世界二七カ国の仏教界の代表がセイロンのキャデイにある仏蘭寺に集まった。そして、仏法の宣揚、仏教徒の友愛と団結、社会・教育・文化およ

全日本仏教会とインドネシア(木村)

び人道上の諸問題への尽力、人類の幸福や調和の推進、同じ目的で活動する他の諸団体との協同などを目的として、世界仏教徒連盟が結成された。⁽¹³⁾ 更に、翌二六日から数日間 にわたって、コロンボ市内で第一回世界仏教徒会議が開催された。この席上で、次回の会議を二年後に日本で開催することが決定されたのである。

(二) 全日本仏教会の発足⁽¹⁴⁾

次回の会議を日本で開催することになり、日本代表としてセイロンを訪れていた高階瓏仙師は大いに困惑したようである。当時の日本は今だ連合国の占領下にあり、経済的にも十分な復興を遂げていなかった。そのため、セイロンで開催された今回の会議でさえも、外貨持ち出しなどに関する連合国側の制約を受け、出発の直前になつても出席が危ぶまれる状況であつた。結局、「仏教国の代表格である日本から一人の出席もないのは遺憾であるし、世界仏教徒会議を開く意義も半減してしまふ、一人でも二人でもよいから是非とも出席してほしい⁽¹⁵⁾」という主催者側の要請とGHQの配慮⁽¹⁶⁾によつて、日本代表の派遣が実現したのである。

そのような状態であったから、高階師としても次回の会議の開催を引き受けることには躊躇せざるを得なかった。しかし、「仏教国」日本に対する周囲の熱い期待は、日本における次期開催を全会一致で可決してしまった。

そこで、高階師とともにセイロンを訪れていた佐瀬淳光、中山理々の両師は、帰国後、当時特定の教団から離れて仏教の伝道に努めていた友松円諦、長井真琴、常光浩然などの各氏とはかり、宗派や僧俗の区別を越えた仏教徒の結集を呼びかけた。その結果、一九五一年二月には日本の仏教復興を目的として日本仏教徒会議が設立された。同会では、国内各地における仏教徒会議の開催と、第二回世界仏教徒会議の開催とを具体的な活動目標に据えて、同年七月から世界会議の準備に着手した。

けれども、会議開催までの道程は平坦ではなかった。何よりも、日本仏教徒会議から資金面などでの協力を要請された既成の各仏教教団、および、その連合体として一九四六年六月に結成されていた日本仏教連合会では、一九五二年五月の段階に至っても、同会議に協力すべきか否かの決定を留保していた。日本仏教連合会としては、日本仏教徒

会議の事務局の中に既成教団に批判的な人達が多く含まれていること、および、世界会議の予算や実施方針が不明瞭であることなどを理由に、世界会議の開催に対して消極的な立場をとっていたのである。

その後、日本仏教徒会議からの度重なる協力要請に対して、日本仏教連合会は、世界会議における事実上の主導権の譲渡を協力の条件として要求した。これを巡って両者の対立は最高潮に達し、世界会議の開催そのものが危機的な状況に立ち至った。しかし、既に海外諸国からは会議への参加申し込みが続々と伝えられており、世界会議の中止は日本仏教界の面目にかけても許されなかった。そうした中で、ついに日本仏教連合会では佐々木泰翁曹洞宗理事の決断と、それに対する東西本願寺の支持により、世界会議の開催に全面的に協力することを決定した。そして七月二一日、日本仏教連合会と日本仏教徒会議とが大同団結して、第二回世界仏教徒会議運営委員会が設置されたのである。それからの二カ月間は、これまでの遅れを取り戻すべく急速な勢いで世界会議の準備が進められた。そして、九月二五日から三〇日にかけて、一八カ国一七〇名の海外代表

と、四五〇名に及ぶ日本代表を集めた世界会議が東京の築地本願寺別院を会場として開催された。その後、各国の代表団は名古屋、京都、広島で順次開催された地方大会に改めて参集し、一連の行事は一〇月一三日まで続けられた。こうして、世界会議は一応の成功裡に幕を閉じたのである。

世界会議の終了後、日本仏教界に残された課題は、大会における決議事項をいかにして実行に移すべきかという問題であった。そこで、これを実行するための機関として、一二月六日、世界会議の運営委員会をもとにして世界仏教徒会議日本連盟が組織された。そして、同連盟の主催により、翌年八月には第一回全日本仏教徒会議が高野山で開催された。更に、種々の対立や軋轢はあったものの、一九五四年六月二五日には、「全一仏教運動」を促進するために日本仏教連合会と世界仏教徒会議日本連盟がともに解散し、新たに全日仏が結成された。全日仏の発足を、当時の『中外日報』は「対立抗争の連続であった日本の仏教史上画期的だといわれている」と報じている。

こうした経緯からも窺われるように、全日仏の誕生は、日本における世界仏教徒会議の開催と、それをきっかけと

全日本仏教会とインドネシア（木村）

した国内仏教界の統一機運から実現したものであった。また、その背景には、アジア諸地域における仏教復興運動の高まりがあったことも見逃せない。それ故全日仏では、仏教界を巡る国内の様々な問題に団結して対処することと並んで、仏教による国際交流の推進が活動目標として掲げられた。その具体的な実践として、同年一〇月には第二回全日本仏教徒会議を永平寺で開催し、一二月にはビルマのラングーンで開かれた第三回世界仏教徒会議に六八名の代表団を派遣した。更に、このビルマ会議への出席を機に、全日仏はビルマにおける戦没者の慰霊法要を日本各地で主催するとともに、日本政府が乗り出したビルマでの遺骨収集事業に積極的に関与することになる。そのことが、後に全日仏がインドネシアにおける戦犯の遺骨送還運動にも関わっていくきっかけを生み出したのである。これについては後程改めて論ずることにしたい。

三 インドネシア仏教界と一九五九年のウエサカ祭

(一) インドネシアの仏教復興

さて、東京国際空港を発った木村は、バンコクで一泊し

全日本仏教会とインドネシア（木村）

た後、六月二〇日午後五時二〇分にジャカルタ空港に到着した。そして、入国手続きを終えて空港を出た彼は、平野文夫在ジャカルタ総領事代理をはじめ、数十人の関係者に迎えられた。

翌二一日、木村は残留元日本兵の西村正道氏と、共同通信社ジャカルタ支局長の清水幸雄氏とともに、日本大使館の車でジャカルタから約五〇〇キロ西に位置するスマラン市へ向かった。同日午後九時頃、スマラン市内にある中国寺院に到着。そこでしばらく休息を取った後、午後一二時頃、彼らはスマラン郊外のワトゴン山頂にある寺院、ヴィハラ・ブツダガヤを訪れた。その頃、同寺院ではウエサカ祭の「前夜祭」が終了したところであり、多数の人々が集合していたと木村は手記に書き記している。木村自身は気づいていなかったが、この日から翌朝にかけて、同寺院周辺ではインドネシアの仏教復興にとって極めて重要な行事が行われていたのである。

そもそもインドネシアにおける仏教復興の始まりは、一九世紀の末にさかのぼる⁽¹⁸⁾。それ以前にも、中国系住民の間では、儒教や道教と結び付いた偶像崇拜を中心とする中国

風の仏教信仰は存在した。しかし、教義的な理解を伴う仏教信仰が近代インドネシアに紹介されたのは、セイロンの仏教復興に大きな役割を果たした神智学協会の支部が、一八八三年にジャワ島に設立されてからのことである。当初、同協会の活動はオランダ人を中心とするものであった。しかし、機関誌の発行などを通して仏教思想の普及をはかった結果、次第にインドネシア人や中国系住民の会員を獲得していった。そして、一九一八年頃にはボゴールの神智学協会支部で、また、一九三〇年にはボロブドゥール遺跡で、いづれも同協会主催のウエサカ祭が行われたと言われている⁽¹⁹⁾。

この神智学協会と並んでインドネシアへの仏教の導入を目指した団体に、ビルマに本拠をおく国際仏教宣教師協会がある。一九二九年、オランダ人のファン・ディーンストが同協会の支部をバタヴィアに設立し、仏教に関する出版活動を行っている。しかし、この団体は短命に終わり、インドネシアの仏教復興に果たした役割なども詳らかではない。その後、一九三四年三月には、セイロンのナーラダ長老がインドネシアの神智学協会員の招きに応じてジャワ島を

訪れた。同長老はボロブドゥール遺跡で菩提樹の植樹を行うとともに、ジャワ島各地で仏教に関する講演を行った。今日、インドネシアの仏教関係者の多くが、この時の同長老の訪問を同国の仏教復興の幕開けとみなしている。

このような外国人達による活動の一方で、インドネシア人として祖国の仏教復興に重要な影響を与えたのが、ペラナカン華人のクエ・テク・ホイ（郭徳懐）である。現地の言葉による精力的な文筆活動を通して仏教思想の普及を目指した彼は、一方では神智学協会などと密接な関係を保ちながら、他方ではバタヴィア仏教協会などを創設して独自の運動を展開した。また、彼は欧米の近代的な仏教研究が明らかにした原始仏教の思想を指向する一方で、儒教や道教と結び付いた中国風の仏教信仰をも容認する態度を示している。こうした姿勢が、結果的には仏教信仰をペラナカン華人の間に浸透させることになったのである。

だが、このような一連の仏教復興運動は、一九四二年に始まる日本軍の進駐と、その後のインドネシア独立戦争のために中断された。そして、独立後の仏教復興は、一九五〇年代以降、比丘僧伽の設立を伴う本格的な形で進められ

全日本仏教会とインドネシア（木村）

ることになる。この運動を中心になって推進したのが、インドネシア人として初めて上座仏教の比丘になったアシン・ジナラツキタ師である。

ペラナカン華人として生まれたアシン・ジナラツキタ師は、幼少の頃から両親とともに中国寺院に参詣し、熱心な観音信仰を育んでいた⁽²¹⁾。また、青年期には神智学協会に入会し、仏教に関する多くの知識を習得した。そして、オランダへの留学を経た後、同師は正式に仏教徒になる決意を固めた。一九五二年、仲間とともにインドネシア三教連合会（G.S.M.I.）を結成した同師は、推されてその会長に就任する。これは、儒教や道教と結び付いた仏教信仰を抱く中国系の住民達が、独立以前から各地で設立していた「三教会」の全国組織として結成されたものである。

その後、一九五三年にはインドネシア三教連合会と神智学協会との共催によって、ボロブドゥール遺跡でウエサカ祭が開催され、インドネシアで初めて仏教旗⁽²²⁾が掲揚された。更にその年、アシン・ジナラツキタ師はインドネシア優婆塞・優婆夷友好団体（P.U.C.I.）を結成するとともに、同師自身はジャカルタにある廣化寺で臨済宗の沙弥になった。

そして、同年末にはビルマへ渡り、翌一九五四年一月二三日、改めて上座仏教の比丘になったのである。

既にジャカルタで臨済僧になっていたアシン・ジナラツキタ師が、仏教の修行のために中国へ行かなかつたのは、同師が中国語を話せなかつたためである。そのため、同師は当初、面識のあるナーラダ長老を慕ってセイロンへ行くことを希望していた。ところが、たまたまビルマの大使がヴィザを発給してくれたために、アシン・ジナラツキタ師はビルマへ行くことになったという。更に、同師は在ジャカルタのビルマ大使の勧めに従つて、ビルマではマハーシ・サヤダウ長老に師事することになった。このマハーシ長老は、当時ヴィパッサナー瞑想法に優れた高僧として世界的に著名であつた。しかし、アシン・ジナラツキタ師はビルマへ行く直前までマハーシ長老を知らなかつたという。⁽²³⁾このことは、同師が瞑想法を学ぶためにマハーシ長老に師事したのではないことを意味する。⁽²⁴⁾

むしろ、当時のビルマはウー・ヌ首相のもとで仏教の国教化が目指されており、その中で、マハーシ長老は国家的な仏教の中心人物として、ウー・ヌ首相の帰依を受けてい

た。また、ウー・ヌ首相の援助によつて、マハーシ瞑想センターがビルマ各地はもとより、海外にまで設立されていた時期に重なるのである。⁽²⁵⁾それ故、想像をたくましくすれば、アシン・ジナラツキタ師がビルマに渡つたことも、また、ビルマでマハーシ長老に師事したことも、背後には海外への仏教伝道というビルマ政府の意向が働いていたのかもしれない。

いずれにせよ、インドネシアの仏教復興運動は、神智学協会と、各上座仏教国の影響のもとに推進されたと言つてもよいだろう。そして、このことは、同国の仏教復興が、二〇世紀中葉における東南アジア一帯の仏教復興運動と連動していたことを物語っているのである。

(二) インドネシア仏教界と日本仏教界の接触

ビルマで上座仏教の比丘になったアシン・ジナラツキタ師は、一九五四年一二月、ラングーンで開催された第三回世界仏教徒会議に出席した。この会議の席上で、「インドネシア（ポロブドール）佛跡の再興を行うためインドネシア政府に協力を要請する。またWFB（引用者注、世界仏教

徒連盟)でも再興委員会を作り協力する⁽²⁶⁾」という議案が、数多くの議案とともに承認された。この議案自体は、セイロン出身のマララセーケラ世界仏教徒連盟会長が提案したものであるが、議案提出の背景には、アシン・ジナラツキタ師がインドネシア仏教徒を代表して同会議に出席していたことも影響しているであろう。なお、同会議には日本からも六八名の代表団が参加している。アシン・ジナラツキタ師と日本仏教徒が接触を持ったのは、おそらくこの時が最初だったと思われる。

同会議の閉幕後、アシン・ジナラツキタ師はインドネシアの仏教徒達の強い要請に応えて帰国した。帰国後、インドネシア三教連合会の会長職を辞した同師は、バンドンを活動の拠点にしなが、仏教に関する講演会や瞑想の指導などを行うために各地を精力的に訪問した。

一九五六年、セイロンの仏暦に従ってこの年を仏紀二五〇〇年と定めた同師は、五月二六日のウエサカ祭を仏紀二五〇〇年祭としてポロブドゥール遺跡で挙⁽²⁷⁾行した。更に、この頃活動の拠点をスマランに移したアシン・ジナラツキタ師は、翌一九五七年二月にスマランでインドネシア仏教

全日本仏教会とインドネシア(木村)

会(Perbuddhi)を結成し、同年五月には仏紀二五〇〇年祭の終結を宣言した。また、同年開催されたインドネシア三教連合会の大会には名誉会長として出席⁽²⁸⁾している。

こうして、インドネシアにおける仏教復興の足場を固めていたアシン・ジナラツキタ師は、一九五七年一月、ジャカルタ、バンドン、スラバヤ、モジョケルト、マランの五都市の仏教徒との連名により、インドネシア優婆塞・優婆夷友好団体の名前で一通の要望書を在ジャカルタ日本総領事に提出した。それは、復興途上にある同国の仏教界に対して、等身大の仏像と仏教文献を寄贈してほしいというものであった。この要望書によれば、当時スマラン郊外にヴィハラ・ブツダガヤという寺院が存在し、仏紀二五〇〇年を記念する第二の寺院が、一九五八年二月の竣工を目指して建設中⁽²⁹⁾だったことが窺われる。

この要望書は、直ちに外務省から全日仏へ回付された。それを受けて全日仏では、当時世界各国に三十三体の観音像の寄贈を目指していた国際親善平和観音讃仰会と連携して、一体の観音像(高さ約三尺)を寄贈することに決定⁽³⁰⁾した。そして、この観音像は一九五八年一月二三日にイ

インドネシア側に引き渡された。しかも、翌二四日には前述のヴィハーラ・ブツダガヤにおいて、インドネシア仏教会の第一回大会が開催されることになっていった。⁽³¹⁾そのため、「十六地域六十名の代表出席の会議席上、右観音像は厳しゅうな儀式をもって同協会会長に手交された」ことが、黄田多喜夫駐インドネシア大使によつて報告されている。⁽³²⁾ちなみに、この観音像が同ヴィハーラ内で八角形の仏堂に納めて祀られている様子は、翌年同地を訪れた木村によつて確認されている。

その後、インドネシア仏教会はインドネシア優婆塞・優婆夷友好団体との共催で、一九五九年のウエサカ祭を国際的な式典として開催する準備を始めることになる。この祝祭は、アシン・ジナラツキタ師が発案し、同師とインドネシア仏教会の会長職にあつたS・サドノ氏が、各国の大使館などを訪れて大使ならびに仏教関係者の出席を要請したものである。その結果、セイロンからナーラダ長老ほか六名、ビルマからマハーシ・サヤダウ長老、タイからウィサーン・サマナクン長老ほか二名、カンボジアからソムダエツ・チョウン・ナート長老ほか一名の、合計一三名の上座仏教

国の比丘とともに、唯一の大乗仏教の僧侶として、日本から木村が招聘されることになった。⁽³⁴⁾

上座仏教と大乘仏教の垣根を越えて、日本から仏教徒の代表を招待した理由について、アシン・ジナラツキタ師は「我々は同じ仏教徒なのだ」と答えるのみである。⁽³⁵⁾しかし、その背景には、同師自身がかつて臨済僧であつた経験とともに、前年の、日本仏教界からの観音像の寄贈が影響していたであろうことは想像に難くない。

(三) 一九五九年のウエサカ祭の開催

ウエサカ祭の開催を控えて、招待された上座仏教各国の比丘達は、一九五九年五月一日以降順次インドネシアに到着した。そうした中で、五月一七日にはジャカルタで一人のペラナカン華人が沙弥ジナプッタとして出家した。

その後、一行はスマラン郊外のヴィハーラ・ブツダガヤへ移り、五月二一日を迎える。同日午前八時、多くの人々が見守る中で、新たに二人のインドネシア人が沙弥ジナピヤと沙弥ジナナンダとして出家した。そして午後一時には、アシン・ジナラツキタ師を含む合計一四名の上座仏教の比

丘達がヴィハーラ・ニ五〇〇に集まり、そこで「シーマー・インターナショナル」と名付けられた戒壇を開創する儀式が執り行われた。同時に、おそらくそこに居合わせた比丘達によって、「サンガ・スチ・インドネシア」という比丘僧伽が設立された。⁽³⁶⁾これによって、比丘の授具足戒式を行う場所と条件が、インドネシアで初めて整備されたことになる。更に午後五時、仏教旗の掲揚を合図にこの年のウエサカ祭の開始を告げる儀式が始まった。比丘達と優婆塞、優婆夷達が読経を行い、引き続き一般信徒達の読経が翌朝四時まで続けられた。木村がヴィハーラ・ブツダガヤに到着したのは、まさにその最中だったのである。

翌二二日午前六時三〇分、全ての比丘と会衆が再びヴィハーラ・ニ五〇〇に集まった。これは、シーマー・インターナショナルで沙弥ジナプッタ師が比丘になる儀式を行うためである。⁽³⁷⁾現代のインドネシアで初めて実施されたこの比丘の授具足戒式は、同国の仏教復興史上、見逃すことのできない重要な出来事であった。しかしながら、木村はこの儀式が行われていたことを知らない。大乘仏教の僧侶である彼に対して、アシン・ジナラツキタ師はあえてこの儀式

全日本仏教会とインドネシア（木村）

のことを伝えていなかったからである。⁽³⁸⁾そのため、木村は儀式の終えた午前九時頃に再びヴィハーラ・ブツダガヤを訪れた後、他の比丘達とは別行動でポロブドゥール遺跡へ向かうことになった。

スマランから約一〇〇キロ離れたポロブドゥール遺跡に木村が到着したのは、午後二時を少し回った頃であった。⁽³⁹⁾既にポロブドゥール遺跡から三キロ程離れた所にあるメンドウ寺院では、数十名の比丘及び信徒達による読経が始まっており、木村は遅れてその一角に座を占めた。ロウソクの炎と線香の煙り、それに人々の熱気のために、狭い室内はかなりの蒸し暑さに達していたようである。やがて読経が終わると、彼らは時計回りに建物の回りを廻った後に、メンドウ寺院を後にした。読経中に降り始めた雨は激しさを増しており、人々はその中をポロブドゥール遺跡に向けて移動することになった。

午後五時、サイレンの音とともにポロブドゥール遺跡前の広場で式典が始まった。特設の壇上には招聘された各国の比丘達とともに、トルコ、アルゼンチン、タイ、ビルマなどの大使や、インドネシア政府ならびに国軍の関係者が



Prosesi mulai berangkat dari panggung panitia pada jam setengah tujuh tepat, didahului oleh penabur bunga dan pembawa pedupaan, disusul oleh para bhikku dalam meditasi.

ku mengibaskan kipas'nya dengan seru, sehingga api lilin tujula padam. Didekat pintu kinsausaha Birma yang berdjasa stelan berlutut dalam pamudjannja, tanpa menghiraukan keringatnja mengujut deras, bertitid' kelantai batu.

Udara mulai mendung. Upatjara didalam selesai. Para bhikku dan pengikut'nja mengudakan prosesi mengelilingi tjandi,

dari liri ketenangan (pradhak-sina). Hudjan rintik' mulai turuniah. Ketika para bhikku turun tangga tjandi hudjan makin deras.

Diserang hudjan

Orang' jang berkeremin di halaman tjandi mulai berlarian mentjari perlindungan. Jang membawa pajuang paling beruntung, ada djuga jang memakai djashudjan atau daun pisang se-



Upatjara persembahkan bunga, dupa, lilin dan air dibawah kaki patung Gautama Buddha didalam Tjandi Atendut. Hanya para bhikku dan beberapa orang upu-upi jang bisa mengikut' upatjara didalam, sebab ruang tjandi sangat terbatas.

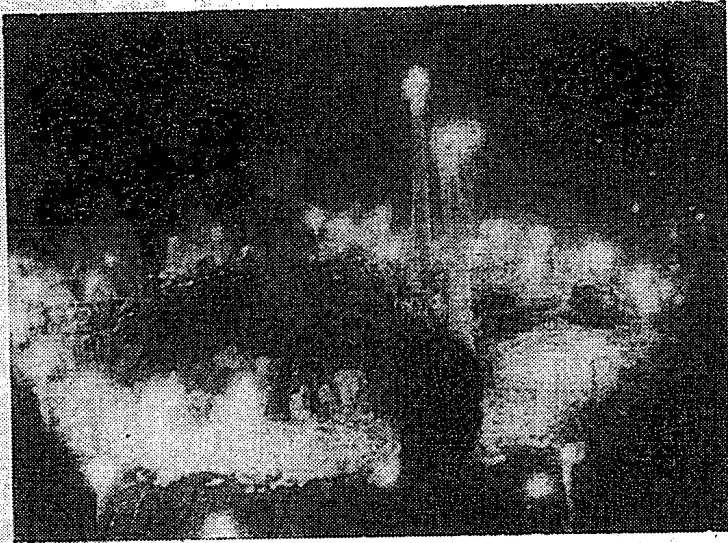
bagai tudang. Dari atas tjandi nampaknja kelompok manusia itu bergelombang sebagai danau jang dilanda topan. Ada jang melarikan diri ke-bis' mereka jang menunggu, ada jang berteduh dibawah pohon'. Tetapi ada djuga jang tak menghiraukan hudjan deras terus naik keatas tjandi untuk bersembahjang atau mengambil bunga' bekas persembahan.

Sekitar pukul empat orang mulai bersiap menuju ke Borobudur. Bis kami tak dapat se-cera berangkat, sebab masih ada beberapa orang jang kurang. Ada jang mentjari makanan, ada jang masih diatas tjandi, atau berteduh dibawah pohon. Jang penghabisan datang seorang wanita tua. Dia baru naik diatas tjandi untuk mengambil bunga bekas persembahan. Dia basah kujup naik dibis. "Buat apa sih?" tanya saja. "Supaja mendapat berkah, agar selamat," djawabnja, menggenung rontakan mawarna erat.

Seperti pasar malam

Didesa Borobudur sudah menunggu lebih banyak orang lagi. Kendaraan' sudah diatur berderet' dengan rapi, dari mobil sedan jang tertaru sampai truk' jang rombeng. Lapangan disekitar Borobudur sudah sangat betjek karena hudjan dan banyak pengundjung jang mengijot setanjaja dan mengijot kaki tjelamanja. Disana sudah berkumpul banyak orang menunggu saat upatjara mulai. Disekitar lapangan banyak terdapat warung jang menjual makanan dan minuman, djuga barang' kerajinan. Tetapi djangan tanya tentang harga'nja. Sepiring nasi soto jang biasanya harga'na Rp. 2.--- atau Rp. 2.50 menjadi Rp. 5.---, setjangkai kopi satu setengah sampai dua rupiah. Semua kesibukan itu mirip dengan pasar malam.

Pukul lima tepat sirene diujikan sebagai tanda upatjara mulai. Terlihat antaranja wakil' dula Turki, Argentina, kuasa-usaha' Birma, Thai, Hadir djuga seledja' Kem. Agama sebagai wakil' menteri, dan utusan' dari negeri' Buddhis, antaranja dari Djepang. Dibatjakan pula pesan' dari Presiden India Prasad dan PM Nehru.



Upatjara persembahkan bunga, dupa, lilin dan air diteras tertinggi di Borobudur. Patung Buddha itu dikelilingi dengan buncarampai, lilin' dan botol' air jang senguaja ditaruhkan oleh umat Buddha. Setelah upatjara botol' itu diambil kembali dan airnja dibawa pulang sebagai air suci.

上掲22頁の左上の写真で、行列の先頭に写っているのがアシン・ジナラッキタ師である。

hari Waisak:

BOROBUDUR HIDUP KEMBALI DALAM TJAHAJA LILIN

Djemaah membandjir sebagai dalam 10 abad jang lampau

Perajaan jang berlangsung semalam suntuk

*Generations of pilgrims came
on the quest of an immortal voice for their worship;
and this sculptured hymn, in a grand symphony
of gestures,
took up their lofty names and uttered for them,
"Let the Buddha be my refuge".*
Rabindranath Tagore BOROBUDUR

*Dari abad keabad djemaah berhaji
menjari lham abadi tuk puja-puja:
dan lagupadji terpatut as, paduan sbatani grrah
mengangkat nama' rendah dan memhisitikan
"Buddha lindunglah aku".*

Oleh wartawan kita — foto oleh penulis

WAISAK adalah perajaan memperingati hari kelahiran, penerangan (bodhi) dan wafatnya Sang Buddha. Dalam zaman modern perajaan Waisak mulai dirajakan pada tahun 1930 di Mendut dan Borobudur atas usaha perhimpunan Theosofi. Pada waktu itu peringatan diselenggarakan setjara dalam lingkungan terbatas, jang menghadiri hanya beberapa orang saja.

Perajaan setjara umum mulai diadakan pada tahun 1953, dan

pada tahun 1959 ini ribuan orang membandjiri Borobudur untuk menghadiri upatjara' perajaan jang dimulakan oleh umat Puddhis itu. Upatjara' diadakan di Mendut dan Borobudur, dua monumen jang agung di Indonesia.

Upatjara di Mendut

Dan untuk pertama kalinya perajaan ini bersifat internasional dengan hadirnja bhikku' dari Birma, Sialan, Thai, Cambodia dan Djepang.

Pukul dua siang halaman tjandi Mendut sudah penuh de-



Beberapa wawidh para bhikku, menjajri para upasaka dan upasika dalam djubah upatjara jang berwarna kuning dan putih. Mereka berdjalan sambil bermeditasi atau menjajikan lampudja.

ngan manusia. Langit tjerah dan matahari membakar terik; mereka menjari perlindungan dibawah pohon besar dihalaman tjandi, atau didekat semak' pajar. Pukul setengah tiga tepat

mulailah barisan prosesi sudah terkumpul bergerak menuju ke tjandi, didahului oleh penabur' bunga dan pembawa pedapaan. Para bhikku' di depan setah dalam djubah' mereka jang djingga tenggelam dalam meditasi chintam. Salah seorang bhikku' nanpakanja berlainan sekali patahannja. Dia itu baru datang dari Djepang, djubahnja tertam dari syian jang ke-biru'an warnanja, dengan sulaman' pinggir warna hitam dan emas. Mereka dilekiti oleh para upasaka dan upasika *) jang mengenalkan djubah upatjara berwarna putih, atau kuning muda.

Didalam tjandi, para bhikku' duduk bersila dikaki patang Puddha, Gautama dan mulai menjutjapkan dsa'nja, menjajrikan lagu' puja-pujanja. Lilin' jang dirajakan menantjarikan tjahaja jang mistis, menerangi wajah patang Buddha jang agung abadi tak pernah berubah sebagai sepuluh abad jang lampau. Harum dupa dan bunga rampai berjampur dengan bau apek tjandi kuno. Didalam tjandi jang tak berventilasi hawa panas terikhan hampir tak tertahan. Para wartawan dan djurupotret' satu demi satu terpaksa muntur teratur. Para bhik-

*) upasaka adalah pendikut biasa berpenji agama Buddha jang telah berdjandi, sika memasi seratur; sa' jang tertentu mereka dapat di-tingkat sebagai ini dari kaum bud-dhis diluar para bhikku' tsanghal. Upasika = upasaka wanita.



Borobudur sewaktu upatjara berlangsung. Prosesi jang membawa lilin ber-kedip' mendaki tjandi sebagai sekelompok kuwang' jang terbang keatas sebuah bukit. Api' jang gemerlapan, sinar bulan jang pudar dan kabut membuat Borobudur seperti dalam dongeng, djauh di-abad' jang terlupa.

☆ Star ☆ No. 701 — 6 Juni 1959

21

1959年のウエサカ (Waisak) 祭の様子を報ずる
Star Weekly 701 (1959年6月6日) の記事

並んだ。木村も「勧められるままに中央の座席に坐をしめた」ところ、上座仏教式のサフラン色の僧服の中で、ただ一人日本風の法衣をまとっていたために、会場の会衆からかなりの注目を集めたようである。「たえずフラツシュを浴びせられ、又サインを求められた」ばかりでなく、後日この式典の様子を伝えた雑誌の記事も、日本人僧侶の列席についてわざわざ一文を加える程であった。

式典では、次々に各国仏教界からのメッセージが読み上げられた。そして最後に、木村が「仏教徒の協力で世界平和の実現に努力したい」という全日仏のメッセージを読み上げた⁽⁴⁾。また、当日出席していた各国の大使やインドネシア政府関係者も祝辞を披露し、インドのプラサド大統領やネール首相の祝辞も代読された。

午後六時三〇分、数多くの祝辞の奉読が終わった頃、雨はようやく霧雨に変わった。比丘達は一列に並んで花々の敷き詰められた通路を通り、かつてナーラダ長老が植えた菩提樹の所まで歩みを進めた。その後、彼らは各々の手にロウソクを持ち、遺跡の東口から階段を登り始めた。一般の信徒達も、同じようにロウソクを持ってその後に従った。

「誰一人雑談する人なく、口々に読経し、稱名を唱えながら静かに深夜の道を登ってゆく姿は莊嚴」であり、「昔をしのぶ巡礼そのものの姿」であつたと木村は手記に書き記している。

彼らは、遺跡の各層の回廊を時計回りに廻りながら順次上壇へ登って行き、やがて小ストウーパの林立する上層部の円壇に到達した。そして、ストウーパ状の覆いのない一体の仏像の前にすべての比丘が集まると、そこで香華灯燭や供物を捧げて三十分程の間読経が行われた。その後、比丘達は順番に下段に降りてきて、二段目の回廊上で瞑想を始めた。午後八時過ぎには雨も上がり、ようやく満月も雲間から姿を現した。そうした中で、ロウソクを手にした一般信徒達は、なおも続々と遺跡を登っていった。その時の様子を、ある雑誌の記者は、「幻想的な光に包まれて、ポロブドゥール遺跡は数世紀の眠りから目覚めたかの如くであつた」と感激を込めて伝えている⁽⁴⁾。

午後八時三〇分、一連の主要な儀式が終わわり、会衆の中には会場を去る者達も現れた。木村は「なお留まって各国の比丘、大衆と一緒に行動したかったけれども、もう一つ

自分に課せられた戦犯遺骨の重要々件をもっている」との理由から、午後一時頃にはインドネシア仏教会のサドノ会長や式典の実行委員などに別れを告げてポロブドゥール遺跡を後にした。

同夜、会場に集まった会衆は五、六万人だったと木村は記録している⁽⁴²⁾。また、三六名の信徒達が、同会場で優婆塞、優婆夷になるための入門式を受けたことが報じられている⁽⁴³⁾。その他、会場では仏教に関する映画の上映がなされたり、比丘による説教が行われるなど、布教のための様々な催しが行われたようである。

翌朝五時、満月が西の空に傾き、ポロブドゥール遺跡に朝靄が立ち込める頃、鳴り響くサイレンの音とともにウエサカ祭は幕を閉じた。

(四) ウエサカ祭の意義とその後のインドネシア仏教界

この年のウエサカ祭は、インドネシア国内で大きな関心を集めた。幾つかの新聞や雑誌が祝祭当日の様子を写真入りの記事で伝えたことにより⁽⁴⁴⁾、同国内における仏教徒の存在が社会的に認知されることになったのである。のみなら

全日本仏教会とインドネシア(木村)

ず、国際的な式典の開催は、同国民が仏教および仏教徒に對して抱く認識を大きく改めさせる結果をもたらした。

と言うのも、もともとジャワ島各地では、かつてのジャワ仏教徒の末裔達が、ひそかに祖先から受け継いだ仏教信仰を守つて暮らしていた。けれども同国内では、こうした人々のことをイスラム教の教えを知らない「知的に劣つた人々」だとみなす風潮が浸透していた。そのため、彼らは自らが仏教徒であると公言することを控えていたのである。同時に、「仏教徒」を意味する「ブドゥー」(budo) という単語は、インドネシア語の語彙として、日常的に「愚か者」という意味で用いられるようになっていた。

ところが、ウエサカ祭にアジア各国の仏教徒の代表をはじめ、インドネシアの政府や国軍の関係者、および諸外国の大使などが多数出席したのである。このことが報じられると、仏教はイスラム教やキリスト教と並ぶ世界的な宗教であり、「仏教徒」は決して「愚か者」ではないことが国民の間に印象づけられた。その結果、これまで自らの仏教信仰を隠していた人々の間から、自発的に「仏教徒」を公言する動きが現れ、仏教への「大量改宗」が発生したのであ

る。また、仏教に関心を抱く人々の中からは、新たに仏教への改宗を決意する者達も現れるようになった。⁽⁴⁵⁾一九五九年のウエサカ祭の開催は、「ブドー」に対する偏見を解消し、仏教への改宗を妨げる精神的な障害を取り除くことによつて、インドネシアにおける仏教徒の数を飛躍的に増加させたのである。

ところで、ボロブドゥール遺跡における式典に出席した上座仏教国の比丘達は、その後インドネシア各地を回つて仏教に関する講演などを行った。そして、六月にはバリ島で、先にヴィハーラ・ブツダガヤで沙弥となつたジナピヤ師が比丘になるための授具足戒式に立ち会つた。これによつて、インドネシア人の比丘は三人になつたのである。このことは、同国の仏教界にとつて重要な意味をもつた。というのも、比丘が三人集まることで、沙弥の得度式を行うことが可能になつたからである。ただし、比丘の授具足戒式を執り行うためには最低五人の比丘が必要である。インドネシアでこの条件が満たされるのは、一九六六年に二人のインドネシア人がタイに渡り、そこで比丘になつて帰国するまで待たなければならなかつた。⁽⁴⁶⁾

ちなみに、インドネシアの比丘僧伽は、サンガ・スチ・インドネシアがその後も存続し、一九六三年にはマハー・サンガ・インドネシアと名称を変更した。更に同僧伽は、一九七四年にはサンガ・アグン・インドネシアと名称を改めて今日まで活動を続けている。

しかしながら、比丘の数が増加するにつれて、次第に同僧伽の中で分裂の兆しが芽生え始めた。アシン・ジナラツキタ師が上座仏教と大乘仏教の融合を目指して独自の「仏乗」一仏教を追究するのに対して、正統的な上座仏教、もしくは大乘仏教を同国に移入しようとする人々が、彼に対する批判を強めていつたのである。⁽⁴⁷⁾そしてついに、一九七六年にはアツガヴァロー師らがサンガ・テラヴァアード・インドネシアを新たに結成し、ほぼ同じ頃にダルマサガロー師らがサンガ・マハーヤーナ・インドネシアを結成した。以後、インドネシアの仏教界には三つの僧伽が鼎立し、それぞれ独自の活動を展開している。⁽⁴⁸⁾現在、これら三つの僧伽に従う仏教徒の数も、現地の仏教関係者によれば五百万人から一千万人を数えるだろうとのことである。⁽⁴⁹⁾

いづれにせよ、仏教がインドネシアで着実に復興を遂げ、

今日のこのような隆盛を生み出した契機として、一九五九年のウエサカ祭が決定的な役割を果たしたことは確かである。この祝祭に、日本仏教徒の代表が請われて出席し、同国の仏教復興の一助を担ったことは、全日仏と日本仏教界にとつても意義深いことだと言えるだろう。木村もまた、日本仏教徒の代表としてこの式典に参加し得たことを、「心中ひそかに誇りに感じる」と書き残している。

四 グロドック刑務所の戦犯遺骨送還運動

(一) 全日本仏教会と戦没者遺骨収集事業

ポロブドゥール遺跡におけるウエサカ祭に出席した翌日、木村達三人は再びジャカルタに向かつて車を走らせた。途中、反乱軍を警戒する政府軍の歩哨に何回か出会いながらも、大使館の専用車であるが故に検問を受けることなく、ジャカルタに帰着したのは午後一時頃であった。そして翌二四日から、木村は全日仏から委託されたもう一つの任務、すなわち、戦犯の遺骨送還をめぐる交渉を開始した。

全日仏が戦争犠牲者の遺骨収集事業に関わるのは、今回が最初ではない。先にも触れたように、一九五六年に日本

全日本仏教会とインドネシア（木村）

政府が実施したビルマでの遺骨収集事業に対して、全日仏は主体的に関与した経験の有している。当時、国を挙げて仏教の復興発展に努めていたビルマは、様々な機会に日本の仏教界との間で交流を行っていた。そうした経緯から、全日仏は必然的にこの事業に関わることになったのである。

仏教界における両国の交流が深まったのは、一九五二年、日本で開催された第二回世界仏教徒会議にビルマの代表団が出席してからである。その後ビルマでは、一九五四年五月のウエサカ祭から仏紀二五〇〇年にあたる一九五六年のウエサカ祭にかけて、第六回仏典結集が開催された。これは、ウー・ヌ首相の主導のもとに、各上座仏教国から多数の比丘や信徒を集めて行われた国家的なプロジェクトであった。その開会式に、日本からは吉田茂首相の祝辞を携えた佐々木泰翁師と長井真琴氏が国賓として招待された。

更に六月には、高階瓏仙師をはじめとする日本仏教連合会の七名の代表が、第三回世界仏教徒会議の打ち合わせと戦没者の慰霊のためにビルマを訪れた。その際に、彼らはラングーン郊外にある二カ所の日本人戦没者の墓地に参拝し、女性の毛髪で織り出した観音像を一葉ずつ、それぞれ

の墓地の土中に奉納している。⁽⁵³⁾ またこの頃、ビルマ政府は日本仏教界に対して、両国間の仏教親善のために約一〇名の日本人僧侶を一年間同国に招聘する意向を伝達した。⁽⁵⁴⁾ この企画は、翌年五月に全日仏が一三名の青年僧をビルマへ派遣するという形で実現する。⁽⁵⁵⁾

一九五四年九月、両国間における戦後賠償問題と国交回復の交渉を目的として、ビルマからウー・チョウ・ニエン工業相が来日した。この機会を捉えて、全日仏では同代表を歓迎する様々な催しを企画し、その中で戦時中の侵略行為に対する仏教界としての謝罪を行うとともに、仏典結集の開会式への招待に対する謝意を表明した。⁽⁵⁶⁾ そして九月二四日、同代表はビルマ政府を代表して、日本政府との間で賠償問題と国交回復に関する交渉を妥結したのである。

同年一月三日、ビルマでは仏典結集の会期に合わせて第三回世界仏教徒会議が開催され、二九カ国の代表が参集した。この会議に全日仏が派遣した代表一行は、開会式前日の一月二日と一九日の二度にわたり、揃って日本人戦没者の墓地を訪れて合同慰霊祭を厳修した。⁽⁵⁷⁾ また、会議の終了後、一行の中の二四名がビルマ各地の仏跡を巡拝し、

その途上、マンダレーの戦跡に立つ日本人墓地とイラワジ河上において戦没者の慰霊法要を行った。⁽⁵⁸⁾ その際に、彼らは同地の砂を採取して日本に持ち帰ったのである。翌一九五五年三月一四日、全日仏は東京都文教区の護国寺において、世界仏教徒会議の報告会と併せて「ビルマ戦没者慰霊法要」を挙行した。その当日、ビルマから持ち帰られた砂は戦没者の遺骨の代わりに奉安され、式典終了後、約千人の遺族に分与された。⁽⁵⁹⁾ こうして全日仏は、ビルマ仏教会との間で親密な関係を構築するとともに、アジアの中でも特にビルマ戦線における戦没者の追悼慰霊に深く関わるようになったのである。

六月一日、全日仏はビルマにおける戦没者の遺骨収集を促進するために、日本赤十字社、日本遺族会、アジア協会、および国会議員有志などと協力して「ビルマ戦没者慰霊会」を設立した。⁽⁶⁰⁾ 既に一九五四年九月から、日本政府はビルマとインドのインパール地域における遺骨収集計画を策定し、内々にその準備を進めていた。⁽⁶¹⁾ この計画が公になったに伴い、全日仏などでも同慰霊会の設立を決定したようである。同慰霊会では連日のように会議が行われ、七月

八日には衆議院の海外引揚特別委員会において、「政府は速やかに彼地遺骨収集の具体的計画をたてられん事を要望する」という緊急動議が可決された⁽⁶²⁾。また、全日仏からビルマに派遣されていた留学僧達も、ビルマ仏教会会長であるウー・ティーン最高裁判所長に面会し、遺骨収集事業に対する同国政府ならびに仏教会の協力を要請した⁽⁶³⁾。

そして七月一九日、ビルマのウー・ヌ首相が来日する。同首相は日本到着後、直ちに東京の築地本願寺別院を訪れ、全日仏が主催した歓迎仏教徒大会に出席した。また、二二日には鶴見の総持寺における万国戦没者慰霊法要に列席した後、「日本仏教徒に告ぐ」と題した講演を行うなど、四日間の滞在期間の大半を仏教による両国親善に費やした⁽⁶⁴⁾。そうした中で、同首相は川崎秀二厚生大臣に対して、日本の遺骨収集事業には「あらゆる便宜を与え、むろん許可するつもりだ」という全面的な援助を約束した⁽⁶⁵⁾。これを機に、ビルマ方面の遺骨収集はにわかに現実性を帯びてきたのである。

その後、全日仏では福岡、京都、仙台においてもビルマ戦没者慰霊法要を行うとともに⁽⁶⁶⁾、遺骨収集の資料を作成す

全日本仏教会とインドネシア（木村）

るために、各府県の仏教会を通して戦没者の氏名や戦死場所などの調査を行うことに決定した⁽⁶⁷⁾。一方、政府においても、一〇月にはビルマ政府から遺骨収集に関する正式な許可を受け、具体的な実施要綱を作成した。そして、翌一九五六年二月、一二名からなる政府派遣の遺骨収集団がビルマ方面へ出発し、一カ月半の間に約一三五一柱を収骨して帰国した⁽⁶⁸⁾。これを受けて、三月一七日には政府主催のビルマ方面戦没者慰霊祭が東京原宿の社会事業会館で挙行され、同式典の終了後、全日仏を始めとする四団体共催の慰霊祭が同所で行われた⁽⁶⁹⁾。それによつて、同地域における遺骨収集事業は一応の終結を見たのである。

一九五八年、ジャカルタで処刑された戦犯の遺骨送還運動に対して全日仏が協力を求められたのは、ビルマ方面での遺骨収集における全日仏の上記のような活躍が、人々に記憶されていたためであった。

(二) インドネシアにおける極東国際軍事裁判

インドネシアは、約三五〇年にわたってオランダの植民地としての歴史を歩んだ。しかし、一九四二年一月に日本

軍がスマトラ島に進駐し、三月にインドネシア駐留のオランダ軍が全面降伏すると、以後三年半、同地は日本軍の軍政下に置かれた。

一九四五年八月一五日、日本がポツダム宣言を受諾する。その二日後の一七日、スカルノ氏がインドネシアの独立を宣言した。だが、同年九月にはイギリス軍が進駐し、翌年にはかつての宗主国であるオランダが本格的にインドネシアへの再上陸を開始した。これを機に、約四年半に及ぶインドネシア独立戦争が始まったのである。

一九四六年八月五日、オランダ軍はインドネシア独立軍から奪取したバタビア（現在のジャカルタ）で、極東国際軍事裁判のための軍事法廷を開廷した。オランダによる軍事法廷は、バタビアをはじめ一二カ所に設置され、審理はインドネシアの完全独立を三日後に控えた一九四九年一月二四日まで続けられた。

オランダの軍事法廷で起訴された旧日本軍関係者は延べ一〇三八人であり、いずれもB・C級戦争犯罪の容疑である⁽⁷⁰⁾。とりわけ、憲兵隊と俘虜収容所ならびに軍収容所に勤務していた者達は、収容所における俘虜および民間婦女

子に対する虐待行為、もしくは食料や医薬品の供給不足などの容疑で全員が逮捕され、その半数近くが起訴された。とは言え、「虐待」の多くが日本軍内部で日常的に行われていた行為であったり、食料などの不足は配給量の絶対的な欠乏に起因するなど、「犯罪」の多くは必ずしも軍組織の末端に位置する個々人が責任を負えるものではなかった。むしろ、そこでは日本の軍隊そのものの責任が問われたと言ふべきである。だが結果的に、オランダの軍事法廷では九六九人が有罪とされ、その内の二三人に死刑判決が下された。

極東における国際軍事法廷を主催したのは、アメリカ、イギリス、フランス、オランダ、オーストラリア、フィリピン、中国、およびソ連の八カ国である。被告人は、その告訴人が帰属する国の主催する法廷で裁判を受けることになる。具体的な資料がないソ連を除く七カ国の中で、日本軍との直接的な戦闘が極めて短期間の間に終結したオランダの軍事法廷が、起訴人数ではアメリカに次いで二番目に多く、死刑判決では最も多い数を記録した⁽⁷¹⁾。この理由については、インドネシア人を独立戦争に立ち上げるように「扇

動した」日本人に対する、オランダ人の報復だという見方が有力である。⁽⁷²⁾

そうした中で、戦争犯罪による訴追を恐れた一部の日本兵が、所属する部隊、もしくは収監された監獄から脱走し、インドネシア独立軍に身を投じた。それ以外の様々な理由で独立軍に合流した日本兵も数多い。彼らの内の過半数が独立戦争の中で命を落としたのに対して、生き残った者達の多くは、同国の独立後にインドネシア国籍を取得した。ジャカルタにおける戦犯の遺骨送還運動に取り組んだ西村正道氏達も、こうした残留元日本兵だったのである。⁽⁷³⁾

バタビアの軍事法廷で死刑判決を受けたのは六四人である。⁽⁷⁴⁾ 彼らの処刑は、一九四六年一月七日から一九四九年一月二日までの間にグロドック刑務所で執行された。処刑の日には、午前八時から一五分おきに銃殺刑が行われたという。⁽⁷⁵⁾ そして、実際に処刑された六二人の他に、拘禁中に自殺もしくは病死した者達を含めて、合計七一人の遺体が同刑務所裏の墓地に埋葬された。その墓地も、「最初、土饅頭のみで何の表示もされなかったが、日本人のたゆまぬ交渉で、ブリキ板の表示が掲げられた」という程質素な

全日本仏教会とインドネシア（木村）

ものであった。しかも、それらは放置され、荒れ果てたまま数年を経ることになる。

一九五〇年代の後半に入り、ジャカルタ市ではグロドック地区の再開発計画が持ち上がった。その計画によれば、刑務所は取り壊され、墓地の周辺は建物と舗装道路によって覆われる予定であった。そこで、この話を聞いた西村氏達は、処刑された人々の遺骨を掘り起こし、それを日本へ送還することを計画したのだ。彼らは一九五七年八月頃までに写真や記録などの収集を行い、一九五八年二月一四日に、独立戦争当時の上官で、親日家でもあるサストロ・アトモジョ元陸軍中佐を会長として「日本軍人戦争犠牲者遺骨発掘、送還委員会」（以下、送還委員会と略）を結成した。そして冒頭にも記した通り、西村氏は日本における遺骨の受け入れ機関を求めて東京在住の実兄に連絡をとった。この実兄は、当初、グロドックにおける刑死者の遺族代表とともに外務省や厚生省に遺骨の引き取りを陳情した。しかし、この陳情は実を結ばなかった。そのため、彼らは全日仏に協力を依頼することになったのである。⁽⁷⁶⁾

(三) 遺骨の送還要請と慰靈法要

ボロブドゥール遺跡から戻った木村は、翌二四日午前一時から、平野総領事代理夫妻や西村夫妻など約二〇名の関係者とともに、グロドック刑務所裏の墓地で慰靈法要を行った。⁽⁸⁾ わずか二、三日前まで草に覆われていた墓地が、当日は何者かの手によつてきれいに清掃されており、訪れた人々を驚かせた。供物と花輪を供えて読経した木村は、その日の感想を「静かに瞑目合掌して冥福を祈る。感慨無量なり。しばし墓前に佇立低頭、去り難く、帰還の日の一日も早からん事を祈りつつ墓前を去る」と記している。

翌日、木村は西村氏に伴われて日本大使館を訪問した。しかし、黄田大使に面会した彼らは、この問題に対する日本政府の姿勢に落胆を覚えることになる。

先に述べたように、一九五六年二月から三月にかけてピルマ方面での遺骨収集を行った日本政府は、同年六月二〇日、今度はオランダ領西部ニューギニア及びイギリス領北部ボルネオ地域に遺骨収集団を派遣した。政府は同地域の遺骨収集に関する外交交渉を一九五五年八月に始めており、当初はインドネシア領のモロタイ島、セレベス島、および

ボルネオ島南部でも遺骨を収集する計画であった。そして、当時日イ両国の間では賠償問題が懸案となっていたにもかかわらず、再三にわたる交渉の結果、インドネシア政府も遺骨の収集を原則的に承認したのである。ところが、収集団の出発間際になって、同国政府は国防省が反対しているとの理由で、遺骨収集船の寄港を拒否する旨を通達してきた。そのため、日本政府はインドネシア領内における遺骨の収集を急遽断念し、遺骨収集団は同国の近海で前後六回の海上追悼式を挙行するにとどまった。⁽⁹⁾ 日本政府は朝日新聞社に対して、同地域に残された戦没者の遺骨は別途収集する予定であると同年八月一八日付で回答している。⁽¹⁰⁾ しかしそれ以降、少なくとも木村がインドネシアを訪れるまで、日本政府が同国政府に対して遺骨収集の許可を積極的に求めることはなかったようである。⁽¹¹⁾

こうした前提の上で木村を迎えた黄田大使は、戦犯刑死者の遺骨送還に関して本国政府から何らの指示も届いていないことを告げた上で、木村に対して、この問題の解決を厚生省に陳情したのかとさえ問いただしている。このことは、西村氏の実兄達による度重なる陳情にもかかわらず、

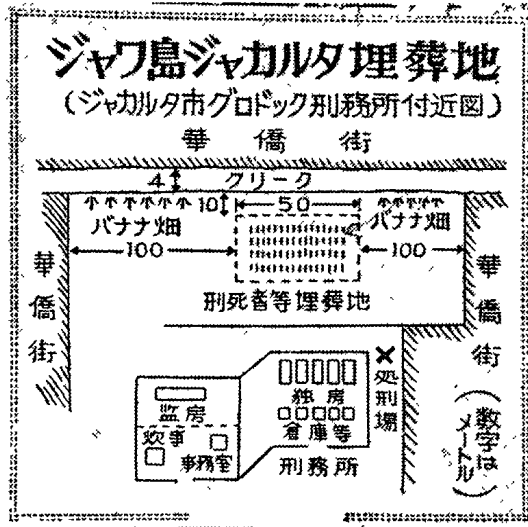


写真 (上)

グロドック刑務所付近の略図 (『東京タイムズ』昭和34年2月25日版より)

写真 (中)

慰霊法要以前の墓地の様子 (西村正道氏撮影・年月日不詳)

写真 (下)

第2回慰霊法要当日の墓地の様子 (昭和34年6月4日撮影)



日本政府がこの問題の解決に向けて具体的な措置を講じていなかったことを窺わせる。

その上黄田大使は、政府としてはインドネシア地域におけるすべての戦没者のことを考えているのであつて、一部の遺骨の送還のみを個別に考えるわけにはいかないと言っている。さらに、全部の遺骨を一度に収集することは不可能だから、まず第一段階として、グロドック刑務所における戦犯刑死者の遺骨から送還の手続きを始めてはどうかと食い下がる木村に対して、同大使は特例扱いを認めない政府の立場を強調して彼の陳情を一蹴した。同時に黄田大使は、日本人は遺骨を発掘するふりをして、金銀などの財宝を掘り出すのではないかという現地の風説を紹介した上で、木村に対して「君が来たからといって、すぐに遺骨を持ち帰るようなことはできない」と述べている。⁽⁸²⁾

確かに、賠償の実施をはじめとする多くの課題を抱える大使館側にとつて、戦犯の遺骨送還問題は優先順位の低い事項であつただろう。だが、この問題の解決を目指す木村達の目には、黄田大使の対応は極めて冷淡なものに映つたようである。彼らは失望感を味わいながら大使館を後にし

ている。

ところが、その直後に訪れたスデイロ・ジャカルタ市長のもとで、彼らは市長の好意的な言葉に接し、遺骨送還の前途に大きな希望を見出した。既に同年一月、同市長は西村氏を市長官舎に呼び、この件は民間団体である送還委員会を推進するのが妥当だという見解を伝えていた。木村が面談した際にも、スデイロ市長は改めてこの考えを主張した上で、たとえ送還委員会が政府関係者と連絡をとることがあつても、遺骨の送還を円滑に進めるためには、それを公表しない方がよいという意見を述べている。その上で同市長は、戦犯の遺骨の送還は他の戦没者の遺骨とは切り離して処理すべきであり、遺骨を送還するためにはそれを請求する具体的な書類を提出することが必要だと語つた。更に、この問題に関する関係各所への連絡には、市長自らが可能な限り援助を惜しまないことを約束している。このスデイロ市長の言葉は、早速共同通信社の清水氏によつて日本に伝えられた。それを受けて、日本の新聞各紙は「早ければ今秋、おそくとも来年には遺骨送還が実現することになるもようである」という希望的な記事を掲げている。⁽⁸⁴⁾

その後、木村はジャカルタ近郊に存在する三カ所の日本人墓地を廻つて慰霊法要を行う一方で、送還委員会のサストロ委員長が滞在先のスラバヤから戻るのを待つて約一週間を過ごすことになる。しかしながら、サストロ氏は多忙のためジャカルタには現れなかった。そのため、当初はサストロ氏とともに訪問する予定であったインドネシア政府関係者を、木村は西村氏とともに訪れることになった。彼らが訪れたのは、西村氏が面識のあるスヤトモ大統領副官、スブロート警備隊参謀長、スongoノ参謀次長兼教育総監、スオンド運輸司令官の四人であった。この中のスヤトモ、スオンド両氏は不在であったが、スongoノ氏は木村に対して、インドネシア独立戦争における元日本兵の活躍に言及しながら、遺骨送還問題に関しても、サストロ氏が帰還するのを待つて善処しようという好意的な回答を与えている。⁽⁸⁵⁾だが、サストロ氏が不在だったことの影響は大きく、政府ならびに国軍関係者を訪問した木村の努力も、結果的には形式的なものにとどまったと言わざるを得ない。

六月四日、木村は午前一〇時半からグロドック刑務所裏の墓地において二回目の慰霊法要を行った。今回は、日本

全日本仏教会とインドネシア（木村）

大使館を通じて慰霊法要の通知が各方面に出されていたため、大使館員や商社の現地駐在員なども含めて約七〇名が参列した。この「戦後はじめての盛大なる慰霊祭」に出席した人々の多くは、それまで戦犯刑死者の墓地がジャカルタ市内にあることさえも知らなかったという。だが、法要を通して「みな思いを一つにし、遥かに故山を考へ、遺族を思」ったことにより、参列者の中からは、日本政府の都合で遺骨の送還を遅らせるべきではないという声が上がった。そして、在留邦人有志の寄付金によつても遺骨の送還を実現させたいという意見が交わされ、様々な協力も申し出された。

この法要の後、木村は残る一カ所の日本人墓地を訪れるとともに、独立戦争の戦没者を祀るカリバタ英雄墓地に参拝し、六月七日午前七時半、ジャカルタ空港を後にした。日本を発つ前に、「帰るときは骨の一部をもつてきたいが、できなければ石か土でも」という希望を語っていた木村であったが、結局遺骨を持ち帰ることはできなかった。しかし、現地における関係者達の熱意を目の当たりにした彼は、近い将来必ず遺骨の送還が可能になるであろうという期待

とともに、墓地で採取した一握りの土をもって帰国の途に就いたのである。

（四）遺骨送還の実現へ

木村は戦犯刑死者の遺骨の一片さえもジャカルタから持ち出すことができなかつた。けれども、彼のジャカルタ訪問は、遺骨の早期送還を求める日本国内の世論を喚起し、政府ならびに民間の諸団体が遺骨の送還に向けて様々な活動を具体化させる契機となつた。

既に五月一日に木村の派遣が新聞紙上で報じられて以来、全日仏や木村のもとへは遺族や戦友をはじめ、全国の人々から激励の手紙や電報が届けられていた。そして、木村の出發後も、彼の現地における動静は随時新聞紙上で報じられてきた。世論のこうした動きとともに、スデイロ・ジャカルタ市長が木村に与えた好意的な回答を受けて、ついに七月には、政府も外務省の同年度予算により、在インドネシア大使館を通してこの問題の解決に乗り出すことを決定したのである。⁽⁸⁷⁾

一方、全日仏では六月一九日に、築地本願寺別院におい

て木村の帰朝報告会を開催し、六月末には旧軍人関係者やインドネシア協会、および民間有志などと協力して「ジャカルタ戦争犠牲者慰霊会」を設置した。⁽⁸⁸⁾ さらに九月には、遺骨送還に関する陳情書を日本とインドネシア両国の政府に提出する方針を固め、遺族からの陳情書の取りまとめを開始した。これらの陳情書は翌年四月三〇日に、全日仏会長名による公式陳情書とともに日本の外務省と厚生省宛に提出されている。⁽⁸⁹⁾ また、一〇月二三日から二五日まで京都の知恩院で開催された第七回全日本仏教徒会議では、木村が提出した「在インドネシア日本人戦争犠牲者遺骨送還を促進しよう」という緊急動議が採択された。⁽⁹¹⁾

このような日本国内での運動とは別に、ジャカルタでも遺骨の送還に向けた動きが活発化していた。六月二四日には送還委員会のサストロ委員長がジャカルタに戻り、関係各所への連絡を行っている。⁽⁹²⁾ そうした矢先に、この問題に対する日本政府の関与が決定されたのである。しかしながら、この決定はこれまで現地で遺骨の送還運動に取り組んできた人々の間では、極めて唐突かつ不快な印象で受け止められた。と言うのも、日本政府はこの問題に関わる一

切の作業を単独で行う意志を明らかにし、西村氏をはじめとする送還委員会の存在を無視する姿勢を示したからである。⁽⁹³⁾ そのため、日本大使館と送還委員会は感情的な対立を残しながら、それ以後の作業を別々に進めることになる。⁽⁹⁴⁾

そして翌一九六〇年四月二五日、インドネシア政府は黄田大使に対して、グロドック刑務所に埋葬されている戦犯刑死者の遺骨の発掘ならびに送還の許可を通過した。⁽⁹⁵⁾ 西村氏をはじめとする送還委員会の人々は、この知らせを複雑な思いで聞いた。もとより、遺骨の送還が実現することは彼らにとっても喜ばしいことであつた。けれども、遺骨の送還を自分達の手で実現し、それを「インドネシア国民より日本の遺族の皆様へ心よりなる贈物」とすることを願つて三年間心血を注いできた彼らから見れば、自分達の頭越しに政府間レベルで遺骨送還の合意が交わされたことは、「鳶に油揚げ」をさらわれたかのような心情であつた。⁽⁹⁶⁾

ともあれ、五月二〇日には、まず三氏の遺骨がインド航空機で送還され、同日午後六時二五分には東京国際空港に到着した。これらの遺骨は空港ロビーで直ちに駐日インドネシア大使から厚生省引揚援護局長に手交され、しばらく

全日本仏教会とインドネシア（木村）

の間厚生省の霊安室に安置されることになつた。⁽⁹⁷⁾

一方、残りの六八氏の遺骨は六月三〇日から発掘作業が開始され、⁽⁹⁸⁾ 七月二〇日にはジャカルタの外国人墓地で日本大使館主催の慰霊祭が厳修された。詳しい経緯は明らかでないが、それまでに日本大使館と送還委員会との間で一応の和解が成立したようである。慰霊祭には日伊両国政府の関係者をはじめ、送還委員会のメンバーや在留邦人など様々な人々が集まつた。式典は、堀川静総領事代理の開会の辞に始まり、中山昭三等書記官から経過報告が行われた。その後、小川平四郎代理大使、インドネシア外務省の書記官、送還委員会のサストロ委員長、戦友代表として残留元日本兵の谷本澄俊氏、ならびに在留邦人代表の狭間照隆氏が順次弔辞を読み上げ、西村氏が読経を行った。そして参列者による焼香を経て、小川代理大使による閉会の辞で幕を閉じたのである。⁽⁹⁹⁾

翌二一日、遺骨は東京船舶所属の京都丸にてジャカルタのタンジョンブリオク港を出港し、二七日にはスラバヤ港で在留邦人の焼香を受けた。そして、九月六日午後三時二〇分、多数の遺族や関係者が出迎える中を東京芝浦港に到

着し、翌七日には厚生省引揚援護局において「インドネシア遺骨拝礼式典」が挙行された。全日仏の関係者もこれらの行事に参列し、一連の遺骨送還運動に終止符が打たれたのである。⁽¹⁰⁰⁾

五 全日本仏教会による代表派遣の背景

一九五九年にインドネシアを訪れた木村は、おそらく同国を訪問した戦後最初の日本人の仏教関係者であった。しかも彼の訪問は、ウエサカ祭に日本仏教徒の代表として出席し、仏教が世界的な宗教であることを同国の人々に印象づけるとともに、それ以後の日本とインドネシアとの仏教交流の基礎を築くなど、⁽¹⁰¹⁾ 仏教による国際親善を促進する結果をもたらした。同時に、戦犯の遺骨送還事業に関しても、木村のインドネシア訪問が日本政府を動かし、一年後に送還を実現させるきっかけになったのである。こうした二つの目的を達成したという意味で、木村と、彼を派遣した全日仏の功績は大きかったと言えることができるだろう。

ところで、木村に課せられたウエサカ祭への出席と遺骨の送還交渉という二つの使命は、表面的には相互にまつた

く関係のない事柄である。しかしながら、この二つの任務の背景や、全日仏がそれらに関わることになった経緯をさかのぼって行くと、いずれも一九五〇年前後のアジア各国、ならびに日本の仏教界を取り巻いていた「復興」と「国際化」の潮流にたどり着く。

先に述べたように、既に一九世紀の末頃からアジア各地で仏教復興を目指す動きが始まりつつあった。そうした運動が一齐に花開いたのが一九五〇年前後のことである。いずれの国においても、それが第二次世界大戦の終結後、植民地状態からの独立や全体主義からの脱却の時期と重なっていたことは興味深い。新体制の樹立という課題に直面した人々によつて、仏教が新たな精神的支柱として期待されたのであり、その結果として、それぞれの国の仏教界自身も人々の要求に応じて変化することを求められたのである。

その一例として、一九五〇年代のインドネシアで仏教復興が本格化した背景には、オランダからの独立の影響を認めることができるだろう。植民地時代にはキリスト教を奉ずる宗主国の下で、イスラム教徒も仏教徒も等しく異教徒であった。しかし、イスラム教徒が大多数を占める独立後

のインドネシアでは、仏教徒が少数派の異教徒にならざるを得ない。その上、仏教徒の大半を占める中国系住民達は、「インドネシア国民」となることで東南アジア諸国の中国系住民から切り離された。同国の仏教復興は、宗教的にも民族的にも少数派となった彼らが、自らのアイデンティティーを明確化するためのものだったと考えることも可能である。また、それ故にこそ、「インドネシアに土着の中国人」という奇妙な出自をもつアシン・ジナラツキタ師が復興を主導したインドネシアの仏教は、同国独自の形態を模索することになったのである。

しかし、仏教復興運動が特に顕著だったのは、外国の植民地化によって仏教の衰退が余儀なくされていた地域であった。そうした地域では、仏教の復興と国家の独立とが一体視されることで、仏教と民族運動とが結び付いた。仏教が国家独立の推進力となったセイロンやビルマでは、独立後は自国内での更なる仏教復興を目指す一方で、仏教を他国に伝道し、他の仏教諸国との連携を模索する動きを示したのである。

セイロンのナーラダ長老がたびたびインドネシアを訪れ

全日本仏教会とインドネシア（木村）

て同国の仏教復興に貢献したことや、セイロン仏教会の会長であったマララセーケラ氏が世界仏教徒会議の開催を呼びかけたのは、まさにそうした活動の一例である。更に、日本仏教徒の代表がこの会議に参加し、次期開催国の指名を受けたことが後の全日仏の結成につながった。このことを考えれば、全日仏の誕生も、セイロン仏教界が仕掛けた仏教の国際化の賜物であったと言うことができるだろう。

一方、ビルマが仏教の国際化を推し進めたのは、特にウー・ヌ首相の影響が大きい。同首相は自ら諸外国を訪れて仏教に関する講演を行い、世界各地に瞑想センターを設立する援助を行うとともに、同国の仏教を学ぶための留学僧を各国から招待している。インドネシアの仏教復興運動が、ビルマで研鑽を積んだアシン・ジナラツキタ師によって主導されたことは、ビルマ政府が推し進めた国際的な布教活動の一つの成果だと言えよう。また、全日仏がビルマにおける日本人戦没者の遺骨収集事業に携わり、ひいてはインドネシアにおける戦犯刑死者の遺骨送還に関与することになったのも、もともとは、日本との間で仏教交流を目指したビルマ政府と同国仏教界の意向に起因するもので

あつた。

このように見て行くと、インドネシアの仏教復興運動は、セイロンとビルマが推進した仏教の国際化に支えられていたことは明らかである。また、日本における全日仏の結成や、全日仏と遺骨収集事業との結び付きの背後にも、両国仏教界の影響を読み取ることが出来るだろう。ポロブドゥール遺跡におけるウエサカ祭と、ジャカルタの遺骨送還運動とを結び付ける一つの接点は、セイロンとビルマが主導した汎アジア的な仏教の「復興」と「国際化」の中に隠されていたのである。

これに対して、木村に委ねられた二つの使命を結ぶもう一つの接点は、日本仏教界自身の「復興」と「国際化」の中にある。もちろん日本仏教界は、戦時中の宗教統制によって様々な制約を受けていたとは言え、必ずしも衰退の途上にあつたとは言えない。それ故、他のアジア諸国の場合と同じ意味で、戦後の日本仏教界の動きを仏教「復興」運動と呼ぶのは適当ではない。しかし、信教の自由や民主主義が初めて明確に規定された戦後の日本社会において、それまで封建的な性格を温存してきた仏教界は、生き残りをか

けて様々な改革を迫られた。同時に、これまでは各宗派が個別に活動し、あまつさえ対立抗争を繰り返してきた日本仏教界が大同団結して全日仏を結成したことは、まさに画期的な出来事であつた。新しい時代に即応するためのこうした試みを、一種の仏教「復興」運動と呼ぶことはあながち的外れではあるまい。

そのような復興事業の一つの中心として、日本仏教界が重視したのが「国際化」の路線である。すなわち、仏教による国際親善と、それにもとづく世界平和の実現に寄与することが目指されたのである。そのための具体的な活動は、おそらく第一回世界仏教徒会議への出席と、第二回会議の日本における開催が嚆矢であつた。もともと、これらはいずれも諸外国からの要請によるものであり、日本仏教界が自ら積極的に行つた試みとはいえない。しかし、こうした機会を通して、日本の仏教関係者の多くは、次第にアジア各国の仏教徒の存在を意識するようになる。

そして、全日仏の結成後、ビルマで開かれた第三回会議には日本から多数の仏教関係者が派遣された。それまで日本仏教徒の間では、大乘仏教こそが優れた仏教であり、東

南アジアの仏教は劣った「小乗仏教」であると軽んずる傾向が残っていた。しかし、ビルマを訪れた人々は、戒律を遵守する上座仏教の比丘の姿と、仏教に対する現地の人々の真摯な姿に接して認識を改めることになった。このような経験を積み重ねることによって、日本仏教界の中には東南アジアの仏教徒を対等なパートナーとみなす視点が醸成され、諸外国の仏教界との間で積極的な交流を行う素地が形成されていったのである。

本文中で詳しく述べたように、全日仏とビルマとの間では、一九五四年から一九五五年にかけて活発な交流事業が行われた。セイロンとの間では、一九五〇年代を通して継続的に友好関係が保たれている。更に一九五六年と一九五七年には、セイロン、タイ、カンボジア、ラオスにおける仏紀二五〇〇年式典にそれぞれ代表が派遣された⁽¹⁰⁾。このように、全日仏が各国へ代表を派遣する一方で、一九五九年には日本でも一一カ国の仏教関係者を招いて「釈尊二五〇〇年を讃える祝典」が盛大に催された。これは、東南アジア諸国との友好関係を増進するために、上座仏教圏の仏紀二五〇〇年式典に倣って日本政府が企画したものであるが、

全日本仏教会とインドネシア（木村）

全日仏の全面的な協力によってはじめて実現し得たものであった⁽¹⁰⁾。

こうした国際交流の一環として、一九五九年にはインドネシアのウエサカ祭にも代表が派遣されたのである。また、その機会を利用して、全日仏がインドネシアの戦犯刑死者の遺骨送還事業に携わったことも、まさしく日本仏教界の国際化が生み出した産物だったと言えることができるであろう。

一九五九年六月七日、インドネシアでのすべての任務を終えて帰路についた木村は、途中シンガポール、クアラルンプール、バンコク、香港を経由した。そして、それぞれの土地に残されている日本人墓地で慰霊法要を行った後、同月一六日午後四時四〇分、日本航空機で東京国際空港に帰着した。一七日間という当初の予定を上回り、合計二九日に及んだ木村の初の海外渡航が終わりを告げたのである。

注記

(1) 木村義祐は筆者の祖父であるため、文中敬称を省略する。

また、本稿で用いる木村の手記や写真、および木村宛の私信

全日本仏教会とインドネシア（木村）

などはいずれも筆者所蔵のものである。

(2) これ以外にも全日仏は、戦後の在留邦人の引き揚げに伴って放置された東南アジア各地の日本人墓地の視察を木村に委嘱している。ただし、本稿では木村のこの第三の使命については詳しく論及しない。

(3) ウエサカ祭は、南伝上座仏教圏において、ウエサカ月の満月の日に釈尊の誕生と成道と入滅を祝う行事である。ウエサカ月は二番目の月であるが、太陽暦では通常五月に相当する。我が国でも一九五〇年代から一九六〇年代には、諸外国の仏教界との親善を目的として各地でウエサカ祭が挙行されていた。なお、「ウエサカ」の原語はパーリ語の *vesakha* であり、インドネシアではそれを *wasaka* と表記する。しかし、本稿では当時の日本における表記法に倣って「ウエサカ」と記す。

(4) 全日仏から各遺族宛に発送された手紙（昭和三四年五月八日付）に、同会が「昨年来」遺骨問題に関与していることが記されている。だが、それが具体的に「昨年」のいつなのかは不明である。

(5) 「戦後外交資料」I—〇一二九、No.二四一六（外交資料館蔵）による。

(6) 鎌田良昭師（当時、全日仏主事）のご教示による。ただし実際には、主に西村氏を中心とするジャカルタ在住の残留元日本兵達と全日仏によって、木村の滞在中の経費はまかなわれたようである。

(7) 『全仏通信』四二（昭和三四年四月二五日）

(8) 『産経新聞』（昭和三五年五月二四日、静岡版）

(9) セイロン、ビルマ、インドの仏教復興に関しては、山本達郎編『東南アジアの宗教と政治』（日本国際問題研究所、一九六九）、藤吉慈海『南方仏教』（平楽寺書店、一九七七）、奈良康明『仏教史Ⅰ』（世界宗教史叢書七、山川出版社、一九七九）を参考にした。

(10) インドネシアの仏教復興に関しては、拙稿「インドネシアの仏教復興とその現状」『愛知学院大学短期大学部研究紀要』八（二〇〇〇）を参照されたい。また、この問題に関する他の文献については、同拙稿の文献一覧に示した通りである。

(11) 一九九七年一月二日—三日に、インドネシアのチパナスにあるヴィハーラ・シヤキャワナランで行った、アシン・ジナラツキタ師に対する筆者の聞き取り調査による。以下に示す同師の証言は、すべてこの時に得たものである。

(12) 藤吉前掲書（注9参照）一〇七頁。

(13) 吉田久一『近現代仏教の歴史』（筑摩書房、一九九八）二四八頁。

(14) 以下の記述は、財団法人全日本仏教会編『全日本仏教会の歩み』（財団法人全日本仏教会、一九八七）、友松円諦「神田寺の屋根の下で」『大法輪』二六（二〇）（一九五九）、および、昭和二七年から昭和二九年までの『中外日報』の関連記

事を参考にした。

- (15) 高階瓏仙「禪の開教」『大法輪』二六(一〇)(一九五九)七二頁。
- (16) 詳しくは、佐瀬淳光「こんな秘話もあった——里見先生を偲びながら——」『高階瓏仙禪師傳』(原田亮裕編、可睡齋、一九七四)を参照。
- (17) 『中外日報』(昭和二九年六月二七日)
- (18) 同国の仏教復興の歴史、特に独立以前の事柄に関しては、石井米雄「インドネシア上座部仏教史研究ノート」『東南アジア研究』一八(二)(一九八〇)、Yoneo Ishii, "Modern Buddhism in Indonesia", *Buddhist Studies in Honour of Hammalava Saddhatissa* (ed. by G. Dharmapala, R. Gombrich and K. R. Norman, Nugegoda: Hammalava Saddhatissa Felicitation Volume Committee, 1984) を参考にした。
- (19) 神智学協会は現在も活動を続けている。だが、同協会に關して特に重要なことは、アシン・ジナラツキタ師をはじめ、独立後のインドネシアの仏教復興に關わった人々の多くが、青年期に同協会に所屬して仏教の理解を深めたことである。この意味で、インドネシアの仏教復興に対しても、神智学協会が果たした役割は大きいと言えるだろう。
- (20) 同国の中国系住民は、大きくペラナカン (Peranakan) とトトク (Totok) に二分される。両者を区別する厳密な定義は困難であるが、言語ならびに文化的な要素に關して、前者が

全日本仏教会とインドネシア (木村)

- 多くの点でインドネシアのそれと同化しているのに対して、後者は中国的な要素を多く残していることが指摘される。詳しくは Donald Earl Willmott, *The Chinese of Semarang—A Changing Minority Community in Indonesia* (Ithaca: Cornell University Press, 1960) 一〇三頁以降を参照。
- (21) アシン・ジナラツキタ師による。
- (22) 青、黄、赤、白、樺の五色からなる。一九五〇年にセロンで開催された第一回世界仏教徒会議の際に掲揚され、その会議の席上で国際的な仏教旗として制定された。
- (23) アシン・ジナラツキタ師による。
- (24) 石井米雄氏は、アシン・ジナラツキタ師がビルマへ渡る際の主な関心は、瞑想法の修行であったと推測している(「石井前掲論文(注18参照)二六四頁」)。
- (25) グスタフ・ハウトマン(土佐桂子訳)「支配者と瞑想者の間——植民地時代とそれ以降における内観瞑想——」『アジアにおける宗教の再生——宗教的経験のポリティクス——』(田辺繁治編著、京都大学出版会、一九九五)を参考にした。
- (26) 『中外日報』(昭和二九年二月一七日)
- (27) アシン・ジナラツキタ師によれば、この時の会衆は三、四千人だったとのことである。
- (28) J. W. M. Bakker, "Contemporary Buddhism in Indonesia", *Buddhism in the Modern World* (ed. by H. Dumoulin and J. C. Maraldo, New York: Collier Macmillan, 1976) 一四九頁によれ

全日本仏教会とインドネシア (木村)

ば、一九五七年には、中部ジャワ地方だけで百人の優婆塞、優婆夷がいたという。

- (29) 「戦後外交資料」I—〇一二九、No.〇八三七(外交資料館蔵)による。後にヴィハラ・二五〇〇と命名されるこの第二の寺院は、仏紀二五〇〇年のウエサカ祭の前日、即ち一九五六年五月二三日に起工式が行われ(Lr. Edij Juangari, *Menabur Benih Dharma di Nusantara—Riwayat Singkat Bhikku Ashin Jmarakkhita*, Bandung: Yayasan Penerbit Karaniya, 1995, 八八—八九頁)、一九五八年二月にセイロンのナーラダ長老を招いて献堂式が挙行された(「石井前掲論文(注18参照)二六五頁」)。なお、Baker前掲論文(注28参照)一四九頁では、ヴィハラ・ブツダガヤとヴィハラ・ブツダジャヤンティという二つの寺院が一九五六年に設立されたと述べられているが、この資料を鑑みるに、特に後者の設立については疑問が残る。
- (30) 一九五三年から一九七四年までの間に、同会では合計三十六体の観音像を各国へ寄贈した。この中でインドネシア仏教会への寄贈は九番目である。なお、同会は本部を名古屋市に置き、古川為三郎氏が会長を務めた。以上、寺沢玄宗『釈尊御遺形傳來史——覚王山日泰寺奉安塔の由来——』(覚王山日泰寺、一九八一)一六〇—一六四頁による。
- (31) インドネシア優婆塞・優婆夷友好団体(P.U.U.I.)の礼状(一九五八年二月二三日付)による。同礼状は「戦後外交資料」I—〇一二九、No.〇八五九(外交資料館蔵)に含ま
- れている。
- (32) 石井前掲論文(注18参照)二六五頁では、二二地域の代表がこの会議に出席したとされている。
- (33) 観音像の寄贈に関しては、「戦後外交資料」I—〇一二九、No.〇八三六—〇八三八、〇八四〇—〇八四一、〇八五五—〇八五九(外交資料館蔵)を参考にした。
- (34) Juangari前掲書(注29参照)一二二頁注一八による。
- (35) アシン・ジナラツキタ師による。なお、上座仏教国であるラオスから僧侶を招聘しなかったのは、同国仏教界と接触することができなかったからだとのことである。
- (36) この僧伽の設立に関して、筆者は未だ詳細を明らかにしていない。本稿では、「サンガ・スチ・インドネシアは、ワトゴンにおける戒壇とともに設立された」という、*Unukmu Mahashavira* (Panita Peringatan Hari Ulang Tahun ke-68 dan 38 Tahun Pengabdian Y. A. Mahashavira Ashin Jmarakkhita, n. d. (1991?))一八頁の記述を参考にした。
- (37) 以上の記述は、Juangari前掲書(注29参照)一一六—一一九頁を参考にした。なお、アシン・ジナラツキタ師によれば、この戒壇で授具足戒式が行われたのは、この時の一度限りであった。同戒壇およびヴィハラ・二五〇〇は既に取り壊されており、現存しないとのことである。
- (38) アシン・ジナラツキタ師による。
- (39) 以下の記述は、主に*Star Weekly* 701(一九五九年六月六

日)二二―二三頁の記事と、木村の手記にもとづくものである。

(40) メッセージの要旨は『日本経済新聞』(昭和三四年五月二五日)による。メッセージの全文は、今回の調査を通して確認することができなかった。ただし、その中には戦犯の遺骨送還をめぐる、インドネシア仏教界の協力を要請する文面が含まれていたようである。しかし、木村はその内容が式典の性格にふさわしくないと考えて、その箇所の朗読を自らの判断で取りやめている。

(41) *Star Weekly* 701 (一九五九年六月六日) 二三頁。

(42) Ishii 前掲論文(注18参照)によれば、当日出席したビルマの比丘も、会衆の数を約六万人と記録しているとのことである。

(43) *Star Weekly* 701 (一九五九年六月六日) 二三頁。ただし、Jungari 前掲書(注29参照) 一一二頁は、入門式を受けた信徒の数を一五名と記している。

(44) *Star Weekly* 701 (一九五九年六月六日) は、三頁にわたって八枚の写真入りで祝祭の様子を伝えている(本文中の写真を参照)。また、筆者が保有している当時の *Pos Indonesia* 紙や *Sim Po* 紙(いずれも正確な発行日は不明)も、それぞれ三枚の写真入りで祝祭を報じている。

(45) アシン・ジナラツキタ師による。

(46) タイにおける二人のインドネシア人比丘の誕生は、*World Buddhism* (1967.5) 二九三頁が伝えている。なお、同記事に

全日本仏教会とインドネシア(木村)

は二人の言葉として、「インドネシア全土に比丘は三人しかおらず、この数では授具足戒式を行うのに不十分である」という報告が載せられている。また、この記事は、当時のインドネシアに五五箇所の寺院が存在したことをも併せて伝えている。

(47) とりわけ、一九六五年のいわゆる共産党のクーデター事件以降、同国政府が全国民に義務づけた「唯一神への信仰」(Keuhanan Yang Maha Esa)の解釈をめぐる、上座仏教の移入を目指す人々と、アシン・ジナラツキタ師との対立が深められた。この点に関して、詳しくは石井前掲論文(注18参照) 二六六―二六七頁、Iem Brown, "Contemporary Indonesian Buddhism and Monotheism", *Journal of Southeast Asian Studies* 18 (1987) 一一一―一一七頁を参照。

(48) 一九六五年から一九七〇年代における同国仏教界の動向についてはHeinz Bechert, "Buddhism in Modern Java and Bali", 『仏教研究』二〇(一九九一)が詳しい。また、三つの僧伽の現在の状況については前掲拙稿(注10参照)を参照されたい。

(49) サンガ・アグン・インドネシアの事務局長であるアリアマイトリ師による。なお、同国政府は政治的な理由により、国内の宗教人口に関する正確な統計結果を公表していない。

(50) インドネシアは一九五六年末頃から内乱状態にあり、一九五七年三月には戒厳令が布告された。一九五八年末頃までに内乱は一応の終結を見せたが、その余波は当時依然として

全日本仏教会とインドネシア（木村）

続いていた。

(51) ビルマでは、この仏典結集を一八七一年にミンドン王が行った第五回結集に次ぐものだと位置づけている。生野善応「ビルマの仏教」〔山本編前掲書（注9参照）所収〕は第六回仏典結集の意義を、「仏教徒の結束を高め上座部の隆盛をもたらしたことのほかに、独立国ビルマの国威宣揚という政治的意義が大きい」と論じている（一六〇頁）。

(52) 佐々木師と長井氏は、それぞれ日本仏教連合会と日本仏教徒会議の代表として派遣された（『中外日報』昭和二九年五月二日、六月二日）。当初ビルマ政府は、日本仏教界のみならず日本政府からも代表の派遣を望んだが実現しなかった。吉田首相の祝辞は、「日緬友好関係のみならず広く東南アジア仏教国に対する関係にもすこぶる意義ありと存ぜられる」という小長谷綽在ラングーン総領事の公電（昭和二九年五月一三日付）に依って発せられたと思われる。以上、「戦後外交資料」I—〇一二九、No.一一四四—一一四六（外交資料館蔵）による。

(53) 「戦後外交資料」I—〇一二九、No.一一六二—一一七三（外交資料館蔵）による。なお、日本人戦没者の墓地における観音像の奉納は、世論への影響という観点からビルマ政府が一時難色を示した。結局、報道機関への公表をしないという条件で、観音像の奉納は許可されている。

(54) 『中外日報』（昭和二九年一月三〇日）

(55) 『全仏通信』八（昭和三〇年六月二五日）

(56) 『中外日報』（昭和二九年八月五日、九月一日、九月二二日など）

(57) 『中外日報』（昭和二九年一月二〇日、二五日）

(58) 『中外日報』（昭和二九年一月一八日、昭和三〇年一月一日）

(59) 『中外日報』（昭和三〇年一月一五日、三月一八日）

(60) 『全仏通信』八（昭和三〇年六月二五日）、『中外日報』（昭和三〇年六月五日）、『朝日新聞』（昭和三〇年六月一日）など。なお、同会の名誉会長には大谷光照全日仏会長、会長には高岡大輔衆議院海外引揚特別委員長がそれぞれ就任した。

(61) 厚生省援護局編『続々引揚援護の記録』（厚生省、一九六三）二二九頁。

(62) 『全仏通信』九（昭和三〇年七月二五日）

(63) 『中外日報』（昭和三〇年七月二日）

(64) ウー・ヌ首相の講演の要旨は『全仏通信』九（昭和三〇年七月二五日）、『中外日報』（昭和三〇年七月二六日）に掲載された。

(65) 『朝日新聞』（昭和三〇年七月二〇日）。その他に『全仏通信』九（昭和三〇年七月二五日）など。

(66) 『中外日報』（昭和三〇年八月二七日、九月二六日、十一月二五日）

(67) 『全仏通信』九（昭和三〇年七月二五日）

(68) 厚生省援護局編前掲書(注61参照)二二九―二三八頁。

(69) 『朝日新聞』(昭和三十一年三月一七日)

(70) 原則としてB級は「通例の戦争犯罪」、C級は「人道に対する罪」とされるが、極東国際軍事法廷の場合、BC級は明確に区別されていない。

(71) 各国の軍事法廷における裁判結果については、茶園義男『BC級戦犯和蘭裁判資料・全巻通覧』(不二出版、一九九二―二六四―二七三頁を参考にした。ただし、BC級戦犯裁判の全貌は未だ明らかではなく、起訴された人数さえも正確には分かっていない。

(72) 内海愛子・村井吉敬『赤道下の朝鮮人叛乱』(勁草書房、一九八七)二二四―二三四頁。このような見解は、既に一九五二年に巢鴨法務委員会が編纂した『戦犯裁判の実相』(不二出版から一九九六年に上下二巻本として刊行された)に示されている(同書上巻二九頁以降を参照)。

(73) 残留元日本兵の過去と現在については、長洋弘『帰らなかつた日本兵』(朝日新聞社、一九九四)、上坂冬子『南の祖国に生きて』(文芸春秋社、一九九七)を参照。なお、残留元日本兵は一九七九年七月に相互扶助団体として「福祉友の会」を結成した。会長の乙戸昇氏(インドネシア名、クンプル・オツド)によれば、グロドックの遺骨送還に関わった人々は既にすべて他界されたとのことであり、筆者がジャカルタを訪問した時(一九九七年一月)には、当時の様子を知る人

全日本仏教会とインドネシア(木村)

に出会うことはできなかった。

(74) この中の二人は後に減刑された。巢鴨遺書編纂会編『世紀の遺書』(巢鴨遺書編纂会刊行事務所、一九五三)には、グロドック刑務所で処刑された人々の遺書も収められている。

また、佐藤源治『ジャワ獄中記』(草思社、一九八五)は、同刑務所で処刑された著者の遺稿を編集したものである。

(75) 西村氏達から聞いた話を記した木村の手記による。

(76) 菊地日出海「解説」(佐藤前掲書(注74参照)所収)二〇六頁。後に同墓地を訪れた木村も、「遺体に土を盛りあげ、名前もわからない小さな木がさしてあるだけで寂しい墓だった」と報告している(『静岡新聞』昭和三四年六月五日)。

(77) 以上、木村の手記による。

(78) この法要に参列した人々の中に、日系ドイツ人のメルブラッド・フィッシャー・トラ女史が含まれていた。彼女は戦犯裁判の際に複数の被疑者を擁護する証人を務めた人であり、遺骨の送還運動に対しても様々な支援を行っている。トラ女史を中心とするフィッシャー家の詳細は、山口幸雄氏が『調研室報』(朝日新聞社調査研究室)九五号(一九九二)一〇〇号(一九九三)で六回にわたって報告している。

(79) 以上、昭和三十一年四月一九日から八月二三日までの『朝日新聞』の関連記事、および、厚生省援護局編前掲書(注61参照)二三八―二四六、二六〇頁を参考にした。

(80) 『東京タイムズ』(昭和三四年二月二五日)は厚生省引揚

全日本仏教会とインドネシア（木村）

援護局復員課の話として、インドネシア国内における遺骨の送還問題は「外務省を通じざる[昭和]三一年春再三にわたって交渉したが、対日感情が悪く拒否されその後は賠償問題などが表面化してきたので中断していた」と報じている。なお、グロドック刑務所の遺骨問題を日本で最初に取り上げたのは同紙のこの記事である。

(81) ただし『中外日報』（昭和三四年一月二四日）は、グロドック刑務所における戦犯刑死者の遺骨送還に関して、「目下厚生省で処理方針を検討中とのこと」と伝えている。

(82) 木村の手記による。なお、黄田大使は六月二日に一時帰国した際に、同様の趣旨の談話を発表している（『静岡新聞』昭和三四年六月五日）。

(83) 日本とインドネシア両国は、一九五八年一月二〇日に平和条約と賠償協定に調印した。そして、同条約と協定は、いずれも同年四月一五日に発効した。

(84) 『朝日新聞』（昭和三四年五月二六日）

(85) 木村の手記による。

(86) 『日本経済新聞』（昭和三四年五月十一日）

(87) 平野氏の木村宛私信（昭和三四年八月八日付）、およびジャカルタ在留の村田健三氏の木村宛私信（昭和三四年七月二五日付）による。

(88) 『全仏通信』四四（昭和三四年六月二五日）。なお、この際に、木村がジャカルタから持ち帰った墓地の土は同本願

寺別院に奉納された（『静岡新聞』昭和三四年六月五日）。

(89) 『中外日報』（昭和三四年六月二七日）

(90) 『全仏通信』五一（昭和三五年五月二五日）

(91) 『全仏通信』四八（昭和三四年一月二五日）

(92) 谷本澄俊氏の木村宛私信（昭和三四年七月九日付）による。

(93) 村田氏の木村宛私信（昭和三四年七月二五日付）による。

(94) 遺骨送還の実現に向けて、日本政府がインドネシア政府との間で行った交渉については、関係する外交資料が公開されていないため明らかではない。また、送還委員会の活動に關しても、その内容を伝える資料などを見つけることはできなかった。

(95) 西村氏の木村宛私信（昭和三五年五月一四日付）による。

なお、『読売新聞』（昭和三五年四月二八日）は、許可のおりた日付を四月二七日と報じている。

(96) 西村氏の木村宛私信（昭和三五年五月一四日付）にこのような心情が吐露されている。

(97) 『全仏通信』五一（昭和三五年五月二五日）。なお、三柱の遺骨が他の遺骨に先立って航空便で送還されたのは、同年五月二四日のスカルノ大統領の来日に合わせたものと推測される。

(98) 『朝日新聞』（昭和三五年七月一日）

(99) 谷本氏の木村宛私信（昭和三五年八月七日付）による。

(100) 以上、『毎日新聞』（昭和三五年九月七日）、『全仏通信』

五九（昭和三六年四月二五日）、および谷本氏の木村宛私信（昭和三五年八月七日付）による。なお、インドネシア国内の他の地域に残された戦犯刑死者の遺骨は、一九六三年五月六日、六月三日、六月三〇日、および一九六五年二月六日と七月六日の五回にわたって、合計二〇四柱が送還された（厚生省援護局編『引揚げと援護三十年の歩み』ぎょうせい、一九七八、四七一頁）。

(101) 全日仏は一九六五年に再びインドネシアのウエサカ祭に代表を派遣した。その後、一九七二年一月、一九七四年一月、一九八三年三月にはインドネシア仏教会の代表が来日し、一九七三年二月、一九七六年二月、一九八三年一月には全日仏の代表が同国を訪問している〔財団法人全日本仏教会編前掲書（注14参照）、一八一―三六頁〕。

(102) 財団法人全日本仏教会編前掲書（注14参照）一〇―一四頁による。

(103) 『全仏通信』四一（昭和三四年二月二五日）、『同』四二（昭和三四年四月二五日）、および昭和三四年三月二九日から四月一二日までの『中外日報』の関連記事を参照した。

追記 本研究にあたっては平成九年度庭野平和財団研究助成を受けた。記して謝意を表します。また、平野文夫氏、清水幸雄氏、鎌田良昭師、乙戸昇氏、アシン・ジナラツキタ師をはじめ、関係各位からは貴重な御教示を賜った。この場を借り

全日本仏教会とインドネシア（木村）

て御礼申し上げます。